

令和4年度第1回鳥取県総合教育会議 議事録

1 日 時

令和4年7月15日（金） 午前10時から午前11時45分まで

2 場 所

鳥取県庁 特別会議室等 オンライン会議を実施

3 出席者

知事 平井伸治
教育長 足羽英樹
教育長職務代行者 中島諒人
教育委員 若原道昭
教育委員 佐伯啓子
教育委員 森由美子
教育委員会事務局 次長 林憲彰
教育委員会事務局 教育次長 中田寛

有識者委員 石原太一
有識者委員 大羽沢子
有識者委員 坂本哲
有識者委員 永見真
有識者委員 福壽みどり
有識者委員 堀江愛
有識者委員 馬淵牧子
有識者委員 山下誉議
事務局 子育て・人財局長 中西朱実
子育て・人財局子育て王国課 川上裕子
子育て・人財局総合教育推進課 藤田博美

4 意見交換

- ・令和3年度鳥取県の「教育に関する大綱」（第二編）の評価について
- ・学力向上について
- ・不登校対応について
- ・令和3年度鳥取県青少年育成意識調査の結果から見える課題について

5 報告事項

- ・部活動の地域移行に関する検討状況について

6 あいさつ

（中西局長）

- ・令和4年度第1回目鳥取県総合教育会議を開催する。開会に当たり、平井知事から挨拶を申し上げる。

(平井知事)

- ・委員の皆様におかれては、大変お忙しいところ貴重なお時間をいただき、感謝申し上げます。また、委員の皆様そして教育委員の関係者の皆様には、子どもたちの育ちのため、この鳥取県の未来のためにご協力いただいております、重ねて感謝申し上げます。
- ・残念ながら今、コロナ禍という特殊な状況の中で、子どもたちは学校に通うということになった。鳥取県内の昨日の陽性者数は 401 人であった。何とか一生懸命抑えようとはしており、他県が急上昇していく中で、400 前後で踏みとどまっているという状況であるが、鳥取県西部を中心として、また上がる気配もないわけではない。昨日、政府の分科会に私自身も出席をさせていただいたが、全国を通じて、今、危機感の募る中で夏休みが間近に迫ってきた。
- ・ただ、救いなのは、卒業した生徒たちが、そのコロナ禍を経て、どういう言葉を最後に残していったのかを伺ったところ、コロナ禍だけでもすばらしい経験ができた、学びができた、いい友達もできたとのことであり、心配されていたように、コロナですべての教育機会が奪われるということではなく、思い出とともに、その蓄積された教養というものも残ったのかもしれない。
- ・今日は皆様とともに、これから少し未来を見据えながら、こうした教育について考える機会となる。「教育に関する大綱」が十分に果たされているかどうか。それを検証することがまず一つであるが、特に学力向上については、残念ながらここ数年、若干低下傾向に入ってきた。片方で前回大議論があったが、少人数学級の導入を順次進めていくのと並行しながら、子どもたちの成長も加速していかなければ意味がないというお話だったと思う。
- ・それにふさわしい状態に持つていくためには、この学力の問題をどう考えたらいいのか、どうやって改善するのか。外部有識者である委員の皆様のご意見をぜひ注入していただきたいと思う。
- ・また、教育委員の皆様も、これを受けとめていただき、その上で意味のあることになればと思う。
- ・このほか、不登校であるとか、様々な課題をいろいろ議論しなければならない。ぜひ意のあるところを酌んでいただき、皆様の積極的なご参画を賜るよう、お願いを申し上げます。
- ・教育とは、学校で教えてもらったことをすべて忘れてしまっても残っているものだと、アインシュタインは言っていた。やはり、そうした形で本当の教養、知識、経験、そうしたものがしっかりと子どもたちの中に残り、それが成長の糧となり、未来の鳥取県を引っ張る原動力となるよう、我々は最大限努力したいと思う。
- ・皆様のご健勝をお祈り申し上げますとともに、鳥取県教育がさらに発展するように、今日の議論が貢献することをお祈り申し上げ、御礼とさせていただきます。

(中西局長)

- ・続いて、足羽教育長に挨拶をお願いします。

(足羽教育長)

- ・今回も新型コロナウイルス感染拡大により、オンラインでの開催となったが、皆様ご多忙の中、この第1回総合教育会議にご参加いただくとともに、平井知事を始め、委員の皆様方には、平素から本県の子どもたちの教育の推進に深いご理解とご協力、ご支援をいただいていることに感謝申し上げます。
- ・先ほど平井知事からも話があったが、今変異株 B A. 5 が猛威を振るっている。学校でも児童生徒はもとより教職員にも感染が急増し、クラスターも多発しているところである。これから夏休みに入るが、子どもたちの学びや教育活動を継続するためにも、早期の囲い込み、そしてマスク、或いは正しい換気の方法、こうした基本的な感染対策を再度、学校現場でしっかり徹底できるように、改めて努めて参りたい。
- ・本日の総合教育会議では、「教育に関する大綱」の評価をはじめとして、本県の継続した課題である学力向上や不登校対策とともに、子どもたちの学びについてご意見を伺うこととなる。前回のこの総合教育会議でも、学力に関しては、委員の皆様方から、例えば石原委員からは、個別最適化の学びに努めることや、大羽委員からは、授業の中身が大切。その意味では、指導教員の指導力についてはどうか、そういったご意見もいただいたところである。今月末には、今年度の全国学力・学習状況調査が公表になる。鳥取で導入いただいている、個々の伸びに注目したとっとり・学力学習状況調査とともに、子どもたちの学びに向

けて、今後も努力を重ねて参りたい。

- ・また、不登校についても、背景要因が多様化している。一層市町村と連携した取組を進めて参りたい。
- ・本日、限られた時間ではあるが、この鳥取の子どもたちが自分の人生を夢、希望を持って主体的に生きていく力を育むために、委員の皆様方からのご意見を頂戴できればと思う。よろしくお願い申し上げます。

7 意見交換

(中西局長)

- ・意見交換に移る。本日の議題は、「令和3年度鳥取県の『教育に関する大綱』の評価」「学力向上」「不登校対応」「令和3年度鳥取県青少年育成意識調査の結果」、報告事項として、「部活動の地域移行に関する検討状況」についてである。最初に、議題から報告事項まで一括して資料の説明をし、その後、有識者委員、教育委員の皆様からご意見を伺う。まず、「令和3年度鳥取県の『教育に関する大綱』の評価」について、教育委員会から説明をお願いします。

(林次長)

- ・「令和3年度鳥取県の『教育の大綱』の評価」について、概要を説明させていただく。資料1-1をご覧ください。令和3年度の指標の達成状況については、A評価が19項目、B評価が43項目ということで、74.7%が概ね成果を上げた。ただし、課題なども引き続き多々あると認識している。達成できた主な項目としては、難関国公立大学の合格者数やコミュニティスクールの導入学校の割合、また特別支援学校の卒業生の職場定着の割合などである。
- ・2番に主な課題としてまとめているものが、C評価になったものである。「高校の魅力化」は定員の入学者数の割合等も70%に届いておらず、「英語力」についても、中学校の教員の英検一級以上の割合が上がっていない。特に教育委員会としても今後留意していきたいと思っているのは、6ページ目の「不登校の問題」である。近年少し上昇傾向にあるので、教育委員会としても、市町村と連携して、個に応じる形で対応していく必要があると考えている。
- ・次の「教職員の働き方」については、年々改善傾向にはあるが、「月45時間」「年間360時間」という目標に到達していないので、引き続き市町村と協力し、先生方に子どもたちとの時間を創出することを目指したいと思っている。
- ・また、「体力・運動能力」についても、目標には少し達していない状況である。
- ・最後の「学力・学びの質」については、評価上はBとなっているが、全国学力・学習状況調査では、すべての分野、教科において、実績が全国平均を下回る状況となっている。これについては、県と市町村とで構成する「学力向上推進会議」で、状況を把握し、市町村と一丸となって取り組み、また、とっとり学力・学習状況調査を県全体に広め、学力の伸びをきちんと把握していき、個に応じた指導に結びつけていきたいと考えている。

(中西局長)

- ・続いて、「学力の向上」に焦点を当て、総合教育推進課と教育委員会に説明をお願いします。

(藤田課長)

- ・資料25ページをお願いします。県内児童生徒の学力の推移についてご説明する。
- ・一番は、全国学力・学習状況調査結果である。表は、国語及び算数または数学の平均正答率の推移を全国と比較したものであるが、平成19年に調査がスタートして以降、平均正答率が全国平均を下回ることはなかったが、平成24年に初めて小学校算数で全国平均を下回り、その後、小学校、中学校の国語、算数または数学の両教科において、全国平均を下回る状況が継続するとともに、全国平均とのポイント差も縮まらない状況にあるなど、学力は伸び悩んでいると見ている。
- ・続いて26ページは英語教育実施状況調査である。国の第三期教育振興基本計画では、中学校卒業段階で英検3級相当以上、高等学校卒業段階で英検準2級相当以上を達成している者の割合50%を目標としているが、平成28年以降、中学校、高等学校とも達成している者の割合は全国平均値を下回っている。全国に先んじて進めてきた少人数学級では、児童生徒一人一人に向き合う時間の増大や指導の工夫改善を通じて、

学びの質を高め、学力向上、そして困り感を抱える児童生徒への細やかな対応が期待されるが、成果には十分に結びついていないのではないかと考えている。具体的な成果を上げていくには、少人数学級の維持、拡充のみならず、一層の指導改善や、学びの質を高める抜本的な改革が望まれるのではないかと考えている。

(中西局長)

- ・教育委員会に説明をお願いします。

(中田教育次長)

- ・学力のデータのなところを先ほど話していただいた。教育委員会としても、全国に先んじて取り組んでいただいている、少人数学級の成果も含めて、学力の向上は大きな課題だと考えている。
- ・昨年の総合教育会議の話を受けて、授業改善について特にどの辺りに注力していったらいいかということ考えた。鳥取県の授業の状況を分析してみると、どうしても基礎基本の習得が中心で、学んだことを活用して、課題解決する力を高める、そういったことを目標にした授業改善にシフトできていなかったと感じている。
- ・子どもたちの状況としては、「算数が好き」「国語が好き」というような、関心意欲は高まっている。子どもたちの準備はできているので、今、やはり大事になってくるのは、先生方の授業を改善していくということである。
- ・こうした現状の中、鳥取県市町村学力向上推進会議において、各市町村長を含め、教育委員会とも共有して、ベクトルを合わせた取組をしていくことが必要だということで、未来を拓くとっとり学力向上プロジェクトを立ち上げて、取り組んでいるところである。
- ・先ほど申した、学んだことを活用して課題解決する力を高める授業改善に向けての取組としては、鳥取県のすべての先生方に、そうした授業を具体的にどのような形で行っていったらいいかということを示すための研修パッケージを作成した。それを教育委員会指導主事が、学校に出向くなど、様々な機会を使って活用し、先生方の研修の中に取り入れていくことを進めている。
- ・また、学んだことを活用し、課題解決する力を高める、そういう力を「求められる学力」と定義して、実際に授業で体現していただくために、エキスパート教員と本県の指導主事が一緒になって、今求められる学力をつけるための具体的な授業の姿を提案していくことも考えている。
- ・もう一つが、とっとり学力・学習状況調査を使った取組である。全国調査は、小6、中3の時点だけのことで、どうしても全体のものになりにくいといった傾向があった。令和2年から段階的に取り入れているとっとり学力・学習状況調査では、子どもたちの学力を経年で見取って積み上げていくことができる。そして、学力レベルの伸びや非認知能力学習能力の変化を、一人一人の伸び、変化を把握しながら学習に生かしていくことが期待できる。ただ、それをどのように活用していくのが今課題になっているので、個人カルテを作成して、先生方の授業の見直しにも役立てるよう、アプリを開発し、一人一人に寄り添った個別最適な学習を進めるための見取り、そして、学校における教育実施の見直しに使っていきたいと考えている。
- ・大きな課題である。全県挙げて取り組んでいきたいと考えている。

(中西局長)

- ・続いて、不登校対応について教育委員会に説明をお願いします。

(中田教育次長)

- ・不登校の現状も、学力の問題と同様に増加が続いている。社会はより複雑になり、子どもたちを取り巻く環境も複雑になってきている。そうした中、不登校の要因背景も、本当に一人一人違い、多岐に渡る状況である。県教育委員会としても、これまで、そういった子どもたちへの適切な支援に繋げられるようなガイドブックを作成したり、研修会を行ったり、学校や市町村教育委員会の取組を支援して参った。
- ・そういう状況でありながら増加が止まらないという状況である。どういった手立てが必要かをしっかり考えていきたいと思っているが、その一つとして、今年度、特に力を入れていきたいと思っているのが、県と市町村、学校が一体となった取組である。資料の36ページに挙げているが、学校の魅力アップ事業を今年度立ち上げた。これは、19すべての市町村教育委員会と県教育委員会、いじめ・不登校総合対策センタ

一が中心となって連携をしながら、それぞれの課題のある学校をピックアップして、外部の指導者、そして県教育委員会の指導主事等と一緒にあって、課題解決のための方策を考え、実行していくという取組である。これまで、後方支援というような形が中心になっていたいじめ・不登校総合対策センターであるが、自ら市町村、学校と一緒にあって、課題解決の方策について探っていき、一緒に取り組んでいくという取組である。大きな成果を期待したい。

- ・また、これまでの取組で成果が上がっているものとしては、33 ページにサポート教室を挙げているが、これは学校復帰を主眼に置かず、子どもたちの居場所を学校の中で作ってみようという取組である。これまで相談室や保健室で過ごしていた子どもたちも、このサポート教室という一つの居場所ができたことで、より自分を出したり、自分の目標に向かって進んでいく姿が見られるようになったという成果が上がっている。
- ・また、そこまでも至らない、ひきこもり傾向にあるような子どもたちに対して、自宅学習支援事業にも取り組んできているが、これも、学習支援の担当者と対象の児童生徒、そして保護者と繋がりながら、一緒に進んでいくという成果を上げているところである。
- ・こういった成果の上で上がっている取組の横展開を図っていきながら、不登校の対応についても取り組んでいきたいと思っている。

(中西局長)

- ・ここで、不登校対応に関連して、39 ページをご覧ください。「家庭あんしん支え愛条例（仮称）」を県で検討している。不登校、ひきこもり、ヤングケアラーに通じるところであり、学校だけの問題、家庭だけの問題ということではなく、老老介護、8050問題などにも続いていく。これまで家庭の中のことにあまり立ち入らなかったところではあるが、家庭の中で、何らかの対策が必要ではないかということで、現在様々な関係機関の方々からご意見を伺っているところである。40 ページは、5月に行った第1回目研究会の概要等である。今後、こういったことについても検討を続けていく。
- ・続いて、鳥取県青少年育成意識調査の結果について説明をお願いします。

(川上課長)

- ・資料の41 ページをお願いします。鳥取県青少年育成意識調査については、本県の青少年の意識や行動を的確に把握するため、5年ごとに行っている調査で、昨年7月に実施した。調査結果から見えてきた課題のうち、今回は2点について、ご説明させていただく。
- ・まず、SNS等に起因するトラブル、自画撮りによる被害の発生についてである。中学校2年生、高校2年生を対象とした調査であるが、自画撮りを求めたことがあるという加害経験、求められたことがあるという被害経験とともに、少人数ではあるが、いるという実態が明らかになった。
- ・令和2年度に鳥取県青少年健全育成条例を改正し、自画撮り画像要求の禁止規定を設け、啓発資料の学校への配布、パネル展示や相談窓口等の周知を行っているところであるが、昨年度、当課において開催した子育て王国とっとり会議においても、この結果をご報告させていただいたところ、委員の中から、県内の児童施設等においても、実際に小学生であっても、自画撮りの被害等もあるという実態を教えていただいたところである。少人数だからということではなく、しっかりと対策を講じて欲しいというご意見も伺ったところである。児童生徒を悪意ある者から守るための取組、SNS等の適切な利用に対する効果的な啓発を進めて参りたいと考えている。
- ・次に、2番目の自死、いじめなど児童生徒が抱える課題についてである。鳥取県における自死の状況については、令和3年は20代以下について12人と、令和2年から4人増加しているところである。今回の鳥取県青少年育成意識調査の結果を見ても、自死を考えたことがある経験がある生徒というのは、前回調査よりも微増している。また、いじめの経験については、年齢によって増減はあるが減少傾向にある。県としても、いじめ・不登校総合対策センターと教育委員会や市町村とも連携して対策を講じているところであるが、個人情報の問題や縦割り等の弊害等もお聞きしているところである。児童生徒の命を守るため、また、子どもたちの健やかな成長を実現するため、必要な対策を講じて参りたいと考えている。

(中西局長)

- ・最後になるが、部活動の地域移行について、教育委員会から説明をお願いします。

(中田教育次長)

- ・部活動の地域移行について、報道等でもなされており、皆様も聞かれたことがあるかと思う。令和4年6月6日に検討会議がスポーツ庁に対して提言を提出した。提言内容は43ページの1の(2)にお示ししたとおりであるが、令和5年度開始から3年後の令和7年度末を目途に、休日の地域移行を進めていくことになった。
- ・44ページの(3)をご覧いただきたい。本県もこれまでいろいろと検討して参ったが、今後、公立の中学校を中心に考えていくというような国への提言があったので、今後は中学校における部活動の地域移行について、運動部だけではなく、文化部も含めて、県としての考え方や対応方針を検討提案していき、各市町村教育委員会や中学校長会、中体連、スポーツ協会等とも一緒に考えていく。また、学校や生徒、保護者にも、この地域移行の方向性について、適宜、報告しながら理解を進めていきたいと考えている。

(中西局長)

- ・それでは有識者委員の皆様から議題等についてご意見を伺いたい。発言は4分ぐらいでお願いします。それでは、名簿の順番でよろしいか。石原委員をお願いします。

(石原委員)

- ・学力向上で、いくつか施策が挙がっているが、カルテの作成の話や、研修パッケージの話は学力向上プロジェクトの方でも伺っている。やはり個人の学力観を養うのにも絶対必要なことだと思うので、しっかり学力のカルテを作成していただきたい。ただ、個人情報であるので、取扱いにかなり注意が必要かと思うが、そのあたりに留意していただきながら、生徒それぞれに合わせた指導内容になるように活用していただきたい。
- ・それから、私は個別最適化という話をよくするが、生徒が一番多く時間を過ごすのは授業時間だと思うので、その時間の改善が一番だと思う。研修パッケージとして「モデル授業」などの動画を作成されるのはすごく良いことだと思うが、それを使った研修などが徹底され、現場できちんとやれるかどうか。そこを見ていく必要があると思う。
- ・個別最適化という話に戻るが、課題の設定が最適になっているかわからない。課題は、その現場の先生方に任されているところがあると思うので、その辺りも、適切になされているか、何がどう適切かどうかなど、そういったことも研究を進めていただきたいと思う。
- ・次、学力調査について、全国学力・学習状況調査の目標が、最上位層とか最下位層で数%目標に足りていないという話も出ている。全体として評価するときには、そういうパーセンテージで良いと思うが、その現場の先生方の視点からすると、自分がどれだけ頑張れば良いのかが分かり辛い指標だと思う。例えば、今までと比べて、学習についていけない生徒をどれくらい減らせば良いのか。学校ないしクラス単位での適切な目標設定があると思う。数値目標達成率を管理職の先生方が見られて、どうやって現場に落とし込むのかは一つの技だと思うので、それぞれの担任の先生や各科目の先生に目標設定していただけたらと思う。
- ・「授業がわかる児童生徒の割合」のところで数学・算数が目標を達成しているのは、すごく良いことだと思う。こういう目標をしっかり達成していけば点は取れるので、英・数・国だけではなく他の科目についても、できれば、何かアンケートの形で調査していただければと思う。
- ・最後に、読書の指標が出ていたので読書について一つ申し上げる。若者文化の中で、T i k T o kなどで書籍を紹介されている方がかなりおり、それによって売れている本もあるようだ。ビブリオバトルをされているようなので、そこで優秀だった生徒のものは共有するなどして、もっとそういう若者文化的に読書を広めていくと良いかと思う。

(中西局長)

- ・続いて、大羽委員をお願いします。

(大羽委員)

- ・今日は、3点、お伺いしたいことと申し上げたいことがある。
- ・1点目は不登校支援について、アウトリーチも考えていかれるのは非常に大事なことだと思う。やはり、現場、現場でどんな指導が具体的に行われているかということも、いじめ・不登校総合対策センターの方々にはしっかり見ていただきたい。適切な指導だったのかを見ていただきたいと思うことが、最近でも幾つかあったので、後方支援というか、現場の先生方の支援をしていただければありがたいと思う。
- ・もう一つは質問になるが、学校の中で、不登校に関連して、「怠学傾向」「この子は怠けているんだ」というような先生の言葉が、保護者や子どもにとって非常に辛いという話を聞く機会が何回かあった。現場の先生の認識はどうなっているのかというのがある。学校に来られないということは、確かに、勉強が嫌だという場合もあると思うが、嫌だったり、怠け傾向がもしあったりしたとしても、それを支援するのが学校の役割だと思う。「この子は怠けているんです」と言った先生が、その後どう対応していくのか疑問である。学校では、今「怠学傾向」という言葉が流行っているのかどうかということが質問である。
- ・それからもう一つの質問は、不登校支援の評価についてである。出席扱いにするような場所が子どもたちにとって増えたが、出席扱いとしても、そういう支援の場所に行ったとしても、依然として不登校の率が改善していないのか。そういうところは含めてなくて、学校に登校しているということだけで評価しているのか。どちらなのか疑問であるので、よろしければお答えいただきたい。
- ・学力向上について、研究する立場の目からすると、独自の調査というのは、全国的にはほとんど役に立たない。だから、逆に全国的位置はどうかということも鳥取県では見ないといけないと思うので、独自の調査の中に、全国との調査なり、標準化されたテストなりと比較できる項目などがあれば良いが、鳥取だけで固まってしまうと、他と比べる時どうするのかという疑問もある。そういう、いろいろな取組がどうなっているのか、気になっているところである。
- ・最後に働き方改革について、今ご提案いただいた良い案や取組がたくさんあったと思うが、それが現場の先生にどれくらい受け入れられているのか、そういう取組をしたことでどれくらい先生方の負担軽減に繋がっているかなど、こういうアプリを使うとこれだけ時間削減できるといった取組と効果の一体の提示がないと、なかなか現場の先生には受け入れられないのではないかと感じた。

(中西局長)

- ・ここで、ご質問のあった怠学傾向や、不登校の数字の扱いについて、教育委員会に回答をお願いします。

(足羽教育長)

- ・大羽委員から、「怠学傾向」という声が聞かれるというご指摘があった。先ほど申し上げたとおり、一人一人の背景を見ていくと、そういうふうに見える部分もあるのかもしれないが、やはり学校の責務は、わかる学び、できたという学び、それをいかに子どもたちに、個々に応じて伝えることではないかと思う。大切なのは、そうした状況にある子どもに対して、次の手は、或いは次の声はどんなことを掛けるのか、ということ。現在もここに注力しているところであるが、大羽委員にそうした声が入ったということであれば、やはりまだまだその辺が十分ではないのではないかと思っているのので、そこをしっかりと丁寧に進めて参りたい。
- ・それからもう1点、学力の点でお尋ねをいただいた。独自調査と全国的位置付けについてであるが、もちろん、本県もとっとり学力・学習状況調査のみで走るわけではない。全国学力・学習状況調査での、「今、求められる力」の具合がどうか、全国的な状況がどうかを見直しながら、さらにはその全国の学力調査とこのとっとり学調をクロスさせながらやろうとしている。全国で見えない個々の伸びをとっとり学調で見られるので、それと全国の状況とをクロスさせて、結果だけではなくて個々の伸びにつなげて参りたいと思っている。独自調査も全国にはどんどん広がっている。100以上の自治体が今参加しているので、そのあたりとも情報を共有しながら進めて参る。

(中西局長)

- ・出席扱いのことや、働き方改革のことについてもお尋ねだったと思うが、それは後程整理して、委員の皆様にお返しするようにしたい。

- ・続いて、坂本委員にお願いします。

(坂本委員)

- ・私からは3点あるが、まず一つ、学力の低下の件に関しては、石原委員と大羽委員のご意見とほとんど同じかと思っている。P D C Aサイクルという言葉だけはよく出るが、一番重要なのは実際これを実践できることで、これがなかなか大変なことである。良い取組とか、独自の取組はスタートしていると思うので、ここは本当に大変だと思うが、必ずそのP D C Aサイクルを意識して、現場がどう実行していけるかということが、すべてなのかなと思う。ここができるようになってくれば、自ずと成果が上がってくると思うので、そこは引き続きお願いしたい。
- ・教員の働き方に関しては、まさに世間で言うD Xのような話だと思っているのだが、根本的に、生徒が帰った後のいわゆる「夕方から仕事」というのがなかなか改善されないということで、残業が増えていくのだと思う。そもそもの仕組みを抜本的に考え直すということがないと、おそらく「夕方から仕事」というのは減らないと思う。D Xという言葉も、デジタル化することがD Xだと、どうしても捉えられがちであるが、もともとのD Xの概念というのは破壊的イノベーションと言われており、つまり「破壊」である。既存のことに囚われてしまうと、絶対にD Xは行われなれないということなので、そこも含めて「夕方から仕事」をどうしてなくすのかということから、抜本的に改革する必要があると思っている。
- ・最後に、県内就職の件について、民間企業の身として自身も今、地元の有志の経営者の数名でボランティアとして学生との交流会を行っている。コロナ禍でなかなか開催できなかつたりしながらも、様子を見ながら行っているのだが、ここに結構多くの学生や高校生が来られる。コロナが落ち着いているときになると、ちょっと声かけると30名から40名来るといったように、実際は結構求められており、地元の経営者の魅力というのはやはり、W e b でもいいが、基本的にはリアルで、その人となりというか、そういうものを知ってもらうことで、学生たちが、鳥取県の企業に実はこういう社長がいて、いい会社があるじゃないかと、興味を持っていくことがすごく重要かと思っている。
- ・アプリの運用というのも、考えてみればわかることだが、アプリを使うきっかけが必要である。とりあえずアプリをインストールしてくれれば使うかということではなく、何かしら情報を得て、それが良いとか便利とか、これを見れば情報を得られるということがきっかけになってアプリを利用することなので、どうしても、このアプリを入れてもらえれば成果のようなことになっているが、それは違うと思う。やはり、リアルで、もっと地元の経営者とか社会人が学生と交流できるきっかけを、W e b でも構わないので、どんどんどんどん作っていった方が良く思う。
- ・もう一つだけ、別に批判しているわけではないが、そういうところに公立の高校生はほとんど来ない。何が違うのかということ、多分先生たちからの「そういうのをやっているから行けよ」とか「行ってみなよ」といった声掛けがあると思うのだが、公立の先生は、声は掛けるが、おそらく、生徒には個別にそういう話はできないとか、そういうことで留まっているのが如実に出ている。その辺は、公立の学校でも、そういうきっかけをしっかりと与えるということを、先生方にも学校にも認めていただいてやっていくのが良いのではないかと思っている。

(中西局長)

- ・続いて、永見委員にお願いします。

(永見委員)

- ・まず、先ほどもあったが、県内就職のことについて話をさせていただきたい。本校でも難関大学に進学している生徒ほど、なかなか就職の際に帰って来ないという現状が確かにある。先日も、ふるさと定住機構の方が来られて、「とりふる」の活用についていろいろお話を聞かせていただいたが、取組としては、県外就学生の興味を引く情報発信等を展開されている点はとても評価できることだと思う。鳥取の旬な話題や、暮らしに役立つ情報、就活情報等を発信し、ふるさと鳥取との関係を繋ぎ止めて、また、今では対象イベント等への参加でポイントが貯まるというようなこともなさっており、楽しみながらふるさとと繋がるということで、そういう公式アプリだということはしっかり認識することができる。
- ・ただ、高校としては、これらを生徒に啓発していかなければという部分があり、どうしても対象が高校3

年生ということになる。これから受験を控える生徒、或いは受験を終えた生徒へ提案するというになると、新しい生活を前にした生徒にアプリの登録促進を行っていくわけであるが、同時にこのタイミングでは少し難しいところもある。定住機構もいろいろ状況を把握しておられるようで、高校を卒業して次にステップする時期に登録するのが一番良いのかもしれないが、なかなかそこは進んでないということをおっしゃっていた。

- ・いろいろ考えてはみたが、確かに以前は就職を考えるような時期になれば、自ずと地元の就職情報に関心を寄せるようになるのだろうと簡単に考えていたところもあったと思う。しかしながら、若者定住というのは大きな問題であり、幸い、近年探究学習が進み、小学校、中学校、高校のすべて、多くの学校が取り組んでいるなかで、地域のことを学ぶ取組が実践されているので、今後はもっと早い時期から、この鳥取県に興味関心を寄せる児童生徒が増えていくのではないかと期待をしている。今後とも、ぜひ若者定住、そしてふるさと鳥取を支えていくこれからの人材の育成にお力添えをいただければと思っているので、よろしく願いたい。
- ・それから2点目、学力向上について、今までお話をされた方と、私もそんなに内容的に思いは変わらないが、学習指導要領も、先行して始めた小学校、中学校、そして今年度も高等学校が年次進行で始まった。もう学力向上の部分は不可欠だと考えている。共通テストでも、近年、問題文や図表を与えて、複雑な複数の情報を解釈していく出題傾向は益々加速しているし、自ら課題を見付け、既存の知識と関連付けて解決策を考えていくという学びは、もう既に各教科の中心になってきている。今後ともエキスパートの教員等による研究事業や研修会などを、公私の枠を超えて、ぜひまた願いたい。
- ・それからもう1点、英語教育の取組について、本校の取組を紹介させていただきたい。英語教育に関して、本校は近年、やはり4技能ということが盛んに叫ばれるので、そこを何とか生徒たちに身に付けさせるように授業改善を行っている。中学校の早い段階から、パフォーマンステストを導入したり、話す力を含む表現力を高めるなど、世界の人々とのコミュニケーションを可能にする英語の力を目標に置いて授業改善を行っている。そんな中で昨年度の後半より、月2回ほど、英語の外国人講師の方に紹介いただき、近隣在住の外国人の方3、4名を招いて、英語村を実施している。初級と中級とし、大きく言えば中学校と高校というふうにやってみているが、非常にたくさんの生徒が参加してくれる。生徒が非常に興味関心を持っているのだということがよくわかった。内容については、コミュニケーションをとることが一番であるが、諸外国の文化なども勉強している。そんなところが影響しているのかは、まだ細かいところまで分析していないが、先日発表された今年度第1回の英語検定の3級以上の二次試験に、大部分の生徒が合格することができた。いろいろなところで興味関心の湧くような取組をこちらからでも導入してやれば、生徒は関心を持っているので、自分から主体的に勉強していくようになるのではないかと思う。これから、学力向上策の一つとして、成長してくれればと願っている。

(中西局長)

- ・続いて、福壽委員に願います。

(福壽委員)

- ・個人的な経験を通しての話になってしまい恐縮であるが、ここ数ヶ月、個人的に、一市民として福祉関係の相談施設と関わりを持たせてもらっているのだが、職員の皆さんが非常に忙しい。相手にしているのが物や数字ではなくて人で、しかもほとんどが困っている人であり、人と関わる職員の皆さんの多忙ぶりというのが、職員の皆さんの心身の健康についても不安になるが、その疲れが相談者への対応にどう影響するのかということも気になる。ただ、増員すれば解決するかというと、助かる人は増えると思うが、職員の皆さんの多忙感解消には繋がり辛く、教育もそうであるが、システムの何とかできないのかと感じた。
- ・そんなことを考えたのが、一見、この総合教育会議はすべての子どもたちを対象にしているように感じるが、実は、こういった困っている子どもたちは、無意識のうちに議論の対象から外してしまっているというか、議論の俎上にすら乗っていないのではないか。ヤングケアラーとか困窮家庭とかいじめの問題もあるが、教育以前の命の問題を抱えている人たちのことを、ここでは救えないのかもしれないが、頭から抜け落ちないようにしておくということがとても大切なことだと思った。

- ・また不登校の問題について、当事者だった子に、どんな対策が望ましいと思うかということを探ねたところ、「先生になる人は基本的に学校が好きだった人、学校にたくさんいい思い出のある人だと思う。先生自身が理解しようとしてないとか、努力していないとは全然思わないけれど、幾ら想像しても、やっぱりわからないと思う。」という意見であった。でも、それでは元も子もないので、思ったのが、「学校とは、何を育てる場所なのだろうか」と。学力ということを一旦別にしておいて、今、多様性とか個性などと言うが、基本的には、集団で人と関わることを学ぶ場で、理想かもしれないが、強い人が強いままでなくて、それぞれの人が経験と議論を積み上げながら、これなら一緒にそこそこ気持ち良くいられるという妥協点を見つけていく場なのかなと思う。もちろん魅力アップというのは素敵な発想だと思うが、みんなに魅力あるというのはなかなか難しいと思うので、学校というものが何を大事にして、何を育てる場所なのかということをもう1回きちんと考えていけば、あれやってみようこれやってみようとはならず、結果、教室が子どもたちにとって安心できる場所になれば、自ずと学力も伸びていくのではないかと感じている。
- ・報告事項に部活のこともあったので、部活のことも少し申し上げると、ものすごく部活指導をされたい先生がいらっしゃるのも事実として、希望する人はしてもいいというのは、何年前かに流行った、「好きの搾取」に繋がってしまわないかと思う。有償になるとすると対価は支払われるのかもしれないが、多忙感の解消は全然進まないで、「好きだから、やりたいんだから仕方ないでしょ」と言うところ結局、「好きの搾取」に繋がってしまうのではないかと懸念している。各競技団体に行われたヒアリングの結果がまさに現実ではないかと思うのだが、これも、学校にとって部活が何なのかということを考えて、私個人としては、平日週末と分けずに、すべて社会教育とか社会体育等、地域に移行しても良いのではないかと感じている。

(中西局長)

- ・続いて、堀江委員にお願いします。

(堀江委員)

- ・県内の市町村でスクールソーシャルワーカーをさせていただいている。各小中学校をグルグル回って授業を見させていただいたり、先生のお話を聞いたりするという自身の経験からの話であるので、虫の目のような話になってしまうかと思うが、お許しいただきたい。
- ・指標で数値が出て成果が見えるのは、「よし、できるな」という実感を得られるものであるもので、それは嬉しいことだと思う。その数値が上がることを願っているが、まず学力向上について、学力向上とは何だろうと改めて考えてみたのだが、教室で子どもたちが頑張っている様子を見ていて、そもそも教室で安心して勉強できているのかということところが、気になるときがある。発信力というか、活用とか応用などのアウトプット力が、なかなか伸びないというような課題も県内にはあるようだが、それは何となく自分の自信のなさとか不安とか、そういうものが教室の中にあると、なかなか人に伝えていく力というのは育ちにくいのかなと思う。
- ・平井知事が最初におっしゃったが、「習ったことは忘れたけれど、でも何か力が残ったぞ」というのは、本当に大事なことだと思うので、何か学び方を知るとか、「わからないとか知らないと言えるよ」とか、「言ってみても大丈夫なんだろうな、この人たちの中なら」などという感じが、子どもの中に生まれてくれると嬉しいと思う。そのためには、少人数になるということもだが、少人数になったとしても多人数だったとしても、福壽委員が先ほどおっしゃったように、その中でいったいどんなものを子どもに託したいのかとか、子どもの中の何を伸ばしたいのかとか、先生方お一人お一人、また地域に合わせた学校の目標といったようなところが共有されてこそだと思う。そうすると、鳥取県としては、どんな先生方を、子どもたちと一緒に生活する先生たちを育てていこうとするのかという、人材育成というか、教員養成といったようなところにも繋がっていくのかなと思った。
- ・不登校やいじめということについては、本当に、「何で」ということは子どもに聞いてもわからなかったりすることもあると思うので、「何で」ということは置いておいて、「今、そうなんだよね」ということを一緒にいる者たちも受けとめた上で、「この先どこに向かいたい」とか、「どんなふうになりたい」というあたりを、伴走していくのかなと思う。でも、伴走する大人の方は、経験値から、将来のことが心配になったり、少しばかり先が見えたりして急に不安になったりするので、伴走者の方が先に走って行ってしまっ

たりすることもあるかなと思う。そういったストレスが生じるのは、当然保護者さんだったり学校だったり、焦りや不安が生まれるのは当然だと思うので、そこも理解した上で、一緒に伴走できるような支援者としてのあり方ができたらと個人的にも思っている。支援者が安心するための支援にならないようにしなければと、心に留め置いているところである。

- ・不登校やいじめの未然防止ということも、先ほど学力向上のところで触れたが、教室が安心できたり安全だったり、それは学びについてもであるし、人間関係についても、そういったところに気をつけていたら、学校はもうちょっと行ってみたいところになるかもしれないと思う。
- ・もう20年ぐらい前に、とある学校の先生がお話してくださったのだが、「教育って、わざとらしくなくわざとやるんだよ。」とおっしゃった。それが何かずっと頭の中にこびり付いており、そういうものなんだなあと思っている。子どもの中に、自分が「できる」と実感できることや、「ここにいる人たちは仲間なんだな」と実感できるように、何かわざと仕掛けて、それをわざとらしくなくサラッとしていくような大人たちが増えるのは嬉しいし、自分自身もそうありたいと思っている。

(中西局長)

- ・続いて、馬淵委員にお願いする。

(馬淵委員)

- ・県内で運動の指導や講演会を行っている。
- ・まず学力についてであるが、家に子どもがいるので、一個人として自分の感じたことをまずお話をさせていただく。子どもが学校でいじめられているという知人に聞いたのだが、先生に呼ばれて学校に行くことが度々あり、そこで学校側は、「いじめを認定しました」と言って、認定されたことを読み上げるような感じで、子どもの気持ちを聞いたり、どうしたいのかを聞くといったことが一切なかったそうだ。資料の33ページに載っている不登校対応の児童生徒の学びの場所について、こんなにあるのだなと、私はすごく感心し、これで成果を上げていると聞いて、なお一層すごいなと思ったのだが、こういったところの提案、「こんなのもありますけど、どうですか」といった情報共有もなかったそうで、やはり、そのように不安に思う生徒や保護者はすごくたくさんおられるかと思うので、そういった問題が発生したときに、先生が説明なされるのか、スクールソーシャルワーカーの方が説明なされるのか、介入するのかどうかという役割分担も含めて、そういった個々に対する対応、その時その時が大事になってくるかと思うので、せっかくこういったものがあるのなら、もっともっと発信していくべきだと思った。
- ・学力が向上しないということが問題とのことであるので、自身の子どもに聞いてみたのだが、「学校の先生の授業が何を言っているかわからなくて、面白くない」と言う。「もごもごもごもご言っていて、何を言っているのか聞き取れないし、授業は受けたいのだけれども、わからない」と。それで、帰ってきてから一生懸命「何を言っていたのかな」というような感じで教科書を探りながら理解を深めているという感じなので、私も運動指導をする身として、運動はできても指導するのはやはりまた違うと思う。先生方も、知識はあってもそれを伝えるということは、また別なのかなと思うので、今後、研修会などなさるとお伺いしたところなのだが、やはりそういった対象となる子どもの発達発育段階だったり、今興味があるものは何なのかとか、そういった個を理解することから始めることも必要かとは思ひ、指導方法、指導スキルの向上も必要なのかなと思う。子どもが「この先生の授業、すごく楽しいな。わくわくするな。次なんだろう。」と思えるような授業が展開していけたら、学力の向上に繋がってくるのではないかと思う。
- ・もう1点運動の観点から申し上げる。2000年を少し超えた頃に始まったかと思うが、学校で昼寝、仕事場で昼寝、いわゆる午睡について、昼寝を10分15分するとすごくリフレッシュするよ、学力が向上しましたよ、仕事の効率が上がりましたよという検証や実施がなされていたかと思う。実際に、お昼ご飯を食べて満腹になると満腹中枢が働いて、いわゆるレプチンというホルモンが出るのだが、体内時計も相まって2時から4時ぐらいがすごく眠くなる。それから血糖値が昼ご飯を食べることによってすごく上昇したり、すごく下降したりして、そのホルモンの作用で眠くなることは体の生理上仕方がないことであるので、「何をサボっているんだ」というような感じではなくて、一斉に昼寝を導入してみるのも、実験というか、検証してみるのもありではないかなと思う。それで学力が向上するならば、それが良かったと思えるかもし

れないし、一方で先ほどのように先生の指導スキルの問題であるならば、そこを徹底検証していくべきではないかと思う。何が学力低下の要因になっているのかということも、もし調査しているのであれば、また教えていただけたらありがたいと思う。

- ・あと1点、不登校のことにに関して、これも運動の側面から申し上げると、子どもだけではなく大人でもあるが、引きこもりになってしまうと筋力や体力が低下して、食欲が沸かなかつたり、逆に食欲が増進したり、食事でも乱れて、睡眠も乱れてくる。やはり成長期の子どもにとって栄養と運動と睡眠はとても大事なことだと思う。この三本柱が重要になってくると思うので、まずそこを整える、ケアということも大事なのではないかと思う。日光に当たるのはとても大事なことで、引きこもりになって本当に家から出なくなってしまうと、日光に当たらない。そうすると、ビタミンDが生成されなくなるので、骨の成長にも悪影響を及ぼす。筋肉は何歳になっても向上するが、骨は20歳までが大事になってくる。それ以上はもう減る一方であるので、やはり、食事でも大事だが、日光に当たるということが骨量に繋がってくるのではないかと思う。
- ・それから、ストレスがあることで交感神経が優位になって副交感神経の作用が下がってくるので、自律神経のバランスも乱れて、頭痛がひどいとか、吐き気がするとか、いろいろな症状が出てくるし、精神面も不安になってくるので、できればどこかの学校で取り入れてくれていたら嬉しいのだが、運動して、心を整えていく。大人たちでもそうだと思うのだが、運動したらストレス発散したとか、ヨガをすると精神が落ち着いたなどといったことは、子どもも一緒であるので、できれば不登校の子どもたちに対しても、どこか運動のできる場所があると良いと思う。不登校の子が集まって勉強する場所が少しずつできてきているのはわかったが、復帰の過程の一つとして、運動を取り入れていってみたいと思う。回復の過程もそれで、うつ患者さんなどもそうであるが、回復の過程に兆しが見えてくると思うので、やり方はできれば対面が一番良いとは思いますが、個々に対応するならばオンラインでも運動はできると思うので、個別で、オンラインで、集団でといった、そういった運動ができるシステムが構築できれば良いと思う。

(中西局長)

- ・続いて、山下委員にお願いする。

(山下委員)

- ・英語教育の今後の取組について話をさせていただく。資料の31ページに、中学校、高等学校ともに生徒の英語力は年々少しずつ向上しているが、国の目標値にはまだ届いていないという事実があり、ここは引き続き全体の底上げをしていかないといけないかなとは思っているのだが、一方で、英会話スクールで指導させていただいている私の立場から意見させていただくと、一部ではすごく上がっていているなど、近年感じている。
- ・1月の頭に英検があったのだが、指導している小学校6年生の子が3級の筆記試験に受かった。面接は先週だったのでまだ結果が出ていないのだが、小学校6年生で3級の試験を通るのはすごいことだと思うので、「すごいね」と話をしたら、「でも、他の子も受けているよ」という返事があり、すごくレベルが上がってきているのだなと感じた。また別の中学校3年生の子も、この度2級を受けて合格した。全体的にはまだ基準に届いていないかもしれないが、一部ではすごく力を付けていっている子が、近年増えていると思うので、引き続き全体の底上げをしていながら、伸びていっている子に対応するためには、教員の先生方の英語力も伸ばしていかないといけないと感じている。
- ・全体の総括に関しては、まずは小学校から英語教育の充実を今まで以上に図っていただいて、楽しい授業を小学校の先生方にさせていただくのが大事かと思う。というのはやはり、中学校1年生、2年生、高校と上がっていくにつれて、英語が嫌いだという生徒が増えていっているような感じがするので、小学校の時点で、英語って楽しいんだと、外国人と話せるのはすごくうれいという気分を味わってもらうことが大事である。苦手意識を少しでも減らしていければ良いかなと思う。
- ・同時に、例えば高校の先生も準1級を頑張って目指されている方も多いと思うのだが、既に準1級を取得されている先生方に関しては、ぜひ1級も狙っていただけたら良いかと思う。実際、この度も高校3年生で準1級を取った子が2人いるので、やはり学校の先生方にも、余裕がある方は1級をぜひ目指して、よ

り学校での指導も充実していただけたら良いかと思う。坂本委員もおっしゃったが、夕方からの仕事が忙しいと、なかなか先生方が自分で勉強する時間を取れないと思う。実際、うちに通われていた学校の先生で、去年か一昨年に1級を取得された方も、準1級から5年か6年ぐらしかけて取られた。すぐ取れるものではないので、早い段階で勉強できる環境を作っていただくのも大事かと思う。

- ・もう1点は不登校に関してであるが、資料に校内サポート教室の配置というのがあり、すごく良いことだと思った。学校に通っていない、自宅を出ることができない子たちに関しては、オンライン学習教材を作って支援やサポートを行うというふうにあったが、動画もあつたら良いと思う。学校には行けないけれど勉強をすごくしたいという子も中にはいると思うので、例えば動画配信という形で、体調が良いときなどに自分のタイミングで、自分のペースでできるような環境も作れた良いのではないかと感じる。

(中西局長)

- ・続いて、教育委員の皆様からご意見をいただきたい。本日、鱸委員が欠席である。それでは名簿の下からの順番でよろしいか。森委員にお願いします。

(森委員)

- ・学力向上の部分と、先ほどのお話でも出ていたが、運動、それから心身の不安であるとか、そういった部分との因果関係はエビデンスも出ていると思う。そして昼寝に関しても、私どもの会社でも取り入れており、女性のスタッフが10分の昼寝をしている。したかしないかによって午後からの効率が非常に違ってくるということで10年以上続いているので、おそらく子どもたちに至っても効果があるのではないかとというのが私の感想である。
- ・私事であるが、私自身もまだPTAの活動を行っており、その中で一つ、不登校のことである案件があった。子どもたちはインターネットでゲームをしており、その中で会話の話を聞いていたのだが、「修学旅行に行きたい」「もうそろそろ来ないと、部屋が決まるぞ」とか、そのような話をしていた。そういうふうにして不登校の子たちにも、ちょっとしたチャンスや、ちょっとした機会やきっかけがあれば、出たいという思いを、出たい気持ちを伝える機会さえあれば、何か第一歩が踏み出せるチャンスがあるのではないかと考えた。子どもたちがゲームをしていることで、こんなところにチャンスがあるのだなど、横で見ているが感じ、子どもたちは意外と、ネットという社会の中で不登校の子たちとも繋がっているもので、何かそういう機会が、一つのチャンスとなればなと実感した。
- ・このように教育現場の中では、時代の変化とともに、見方を変え、対策を変え、因果関係の考え方を変え、ということ、今一度、この今大事なところに来ているなということを感じているので、皆さんのご意見を聞かせていただいたことを参考にさせていただき、ぜひ検討させていただきたいと思う次第である。

(中西局長)

- ・続いて、佐伯委員にお願いします。

(佐伯委員)

- ・3点述べさせていただきたい。
- ・まず大綱の評価の中で各委員からも出たが、特に「算数・数学の授業がわかる」という割合がA評価であり、その点、それから「家で、自分で計画を立てて勉強している」割合もA評価ということで、そこは良かったが、全国学テの結果の方には、それが残念ながら反映しておらず、そこはさらに授業改善を進めていかなければならないと考えている。県の指導主事の先生の訪問指導も効果を上げてきているのではないかと考えているが、今後、より一人一人の学びが確かなものになることを願っている。その意味で、お話にも出た個人カルテの作成を軌道に乗せて、一人一人が、人と比べるのではなく、自分自身の学力の状況を理解し、また学ぶ意欲が高まるような、先生の声かけや指導ができていけばいいのかなと考えている。
- ・最も気がかりなことは、不登校の出現率の高さである。特に小学校が増えているなと思った。学校に行き辛いと感じ始めたきっかけというのは多岐にわたるが、私としては、先生のこととか友達のこと、という割合が多いと感じた。これはすなわち、子どもたちに関わる教員の学級経営力が問われていると思っている。先生や友達の何気ない言葉であっても、子どもたちにとっては傷つくものであったり、自分の居場所がないと感じられるものだったりということがあつたと思うので、複数の教員が関われるような環境設定が

望まれる。教科担任制とか、クラスを解体してのグループの編成など、人間関係を固定化しないで、活動が行えるような仕組みをもっと取り入れて欲しいと思う。グループの人数編成なども目的に応じて少人数や多人数のグループがあっても良いと思うし、子どもたちの特性とか、個性に応じたものになるような配慮を現場の担任がするべきだと思っている。中学校ではサポート教室の取組の成果が上がっているということで、限られた学校しかないのも、もっとそのような場が設けられることや、小学校でもそれができないのかなと感じている。

- ・特別非常勤講師が入られて、体験活動などが行われるようであるが、この中には、例えば陶芸とか書道とか楽器の演奏とか、先ほど馬淵委員もおっしゃったような運動とか、そういうことを体験することで、講師として来てくださっている方との触れ合いや出会いがあるし、それを通して、「学ぶことって楽しいな」「一緒にするといいな」というような気持ちが持てると思う。そして自尊感情が高まっていくという機会にもなると思う。従って、今後も一層柔軟な考え方で子どもたちの居場所ができて、取組が進んでいくことを願っている。
- ・最後に、鳥取県青少年育成意識調査の結果であるが、自死を考えたとか、いじめの被害加害経験のある児童生徒がおり、そばで見守っている教員の注意深い見守りというか、一人一人の様子をよく見て変化を見逃さないということと、それとともに、たくさんの周りにいる子どもたちの気づきとか、声掛けを大切にしたいと思っている。そのためには、人間関係づくりとか、スクールカウンセラーと担任との心理教育などに力を入れていきたいと思っている。周りの友達が嫌な思いをしていないかとか、傷つけるような言動をとってしまう友達にも、何か悩みがあるかもしれないというような思いが持てるように、子どもたち同士の対話を重視した取組を継続したいと思う。困り感を出し合えるとか、共感し合えるような集団づくり、自分たちの生活をより良くしたいと願って行動できるような、そんな自治の力が育成できるような取組を進めていけたら良いと思っている。

(中西局長)

- ・続いて、若原委員にお願いします。

(若原委員)

- ・時間が大分迫っているので、急いで1点だけお話をさせていただきたい。
- ・資料の5ページの2の主な課題の最初の県立高校の魅力化について、今日はあまり話題になっていないが、これについて少し、意見を述べさせていただきたい。県立高校の魅力化、個性化、これは他の高校にはない、付加価値を高めて、他の高校との差別化を進めていくという、ブランディングという課題であるが、定員に対する入学者数の割合がC評価になっている。つまり、定員確保がうまくいってない、定員割れしているという、目標に達していないということであるが、一般的に定員を確保するために行われる改革というのは、一つは学校の入口である入試の改革。それから、カリキュラムや、教育方法や、施設設備の充実といった中身の改革。それから出口の就労支援の充実。こういうことが定員確保のために行われるわけであり、当然、これまでも行われてきているわけであるが、実は、これだけでは減り続けている子どもの数への対応ができないわけである。
- ・大学だと、18歳人口の減少に対して、例えば外国人留学生を増やすとか、社会人学生を増やすとかいうことが一つの方法として考えられる。高校だと、それに関連して言えば、県外からの生徒の受け入れを増やすということが一つ考えられるが、子どもの数の減少に対しては、これだけでは限界があるということで、当然今後、高校の入学定員の見直しということ、つまり、入学定員を減らしていくことを考えていかなければならないわけであり、入学定員を減らしておくとなると、学校規模が小さくなっていく。ということは、やはり高校の再編成ということが今後課題とならざるを得ないわけである。
- ・これまで、日本の高校は、戦後の教育改革で、小学生とか男女共学とか総合制という形でスタートをして、特に1960年代の高度経済成長期に後期中等教育の多様化が図られ、高校段階が多様化し、そして今日に至っている。今日、新しい形の総合制高校や、或いは単位制高校もあるが、それだけではなしに、今後、生徒数の減少が避けられない事実に対して大きな改革が必要になってきている。現在大きな変革期にあるということで、教育委員会でも当然この議論を進めているわけであるが、今後の大きな課題であろうという

ふうに考えている。

(中西局長)

- ・続いて、中島教育長職務代行者にお願いします。

(中島教育長職務代行者)

- ・若原委員からもお話があったが、今、鳥取県教育委員会での非常に重要な課題の一つとして、高校教育を、未来を見据えてどう変えていくかという話をしている。中等教育後期というものをどう捉えていこうか、どう目標設定をしていこうかということが重要な議論になっている。つまり、教育というのは何を目指していくのかということ、その基本に立ち返った議論をしている。
- ・今日、皆さんから、不登校のお子さんの話であるとか、学力が難しいお子さんの話などを伺って、そういう困ったお子さんへの視線をいろいろな形でご提供いただけたということは本当に素晴らしいことだと思うし、私たちも常にその視点は持ちながらやっているつもりであるが、改めて重要なことだと確認した。
- ・そして同時に思うのだが、私たちは、例えば不登校のお子さんなどが状況に対して不適応だと思う。その裏返しでは、例えば、それなりに自分の希望を叶えて、いわゆる良い大学に行ったお子さんっていうのは、うまくいっているお子さんだというふうに思う。大抵そう思って良いのかもしれないが、一方で、本当にそこに見落としがしないのかということも、同時に考えなければならぬと思っている。
- ・つまり、私たちの学校の目標設定というのは、いわば、どんなお肉も野菜も、魚もゴボウもピーマンも、ちょっと苦い野菜も満遍なく、何でも「おいしい」と食べられる子どもを育てるということを目指している。もちろんそれはそれで素晴らしいのだが、そういうお子さんの中にも、もちろん悩みがあるし、ピーマンが食べられないのだけれども、一つ好きな食べ物があって、その一つの好きということを大事にしながら、何かそのことを持った子どもの可能性を残していくということも大事である。その両方の中で、今求められていることというのは、それぞれの発達段階に応じて、自分を客観化し、自分を知って、自分の得意なこと何で、自分はこういうこと伸ばしていったら良いのだということ、それなりの小さいときから、小学校中学年ぐらいから、自分を客観化して自分の能力、得意なこと、或いはどちらかということと苦手なことということ認識していく中で、自分を伸ばしていく。自分を世界でただ一つのものとして大事にし、誇り、それを通じて、他者と交歓していく。そういう人間をどうやって育てていくかということがおそらく一番大事なことだろうと思っている。
- ・そう考えたときに、具体的話になってしまうが、鳥取版の学力学習状況調査で注目すべきだと思っているのは、自分の伸びしろが測れるということである。今まで評価というのは常に先生がつけてきて、神が評価をしてくれるというような関係だったものが、自分で評価できる。自分で、自分は伸びているというふうに、自己評価ができるということは、すごく大事なことだと思っている。そういうふうに、他者に評価を委ねるのではなくて、自分で自分を評価していくという能力をつけていくことが、今の学びというか、人間の成長にとって、もちろんそれは子どもだけではなくて大人にとってもそうだと思うが、それが一番重要なことなのだと思う。鳥取県の教育の中で、先ほど初めにお話した中等教育後期ということも含めて、自分を客観化しながら自分も伸ばしていく、苦手なことに挑戦するということも含めて、自分を伸ばしていくということ、鳥取県の一つの重要な教育の目標ということにしていくということなのかなと、今日のお話をお聞きしながら感じた次第である。

(中西局長)

- ・続いて、足羽教育長にお願いします。

(足羽教育長)

- ・委員の皆様には、大変貴重なご意見をたくさんいただき、感謝申し上げます。
- ・大きく括りながら簡単に整理させていただきたいと思う。まず、働き方改革の観点で大羽委員、福壽委員からご意見をいただいた。取組がどう軽減に繋がっているかという点では、全校統一の業務支援システムを導入している。これによって年間 120 時間ぐらいの時間外勤務が削減されたというデータも出ているので、そういう実感ができるような取組に繋げていきながら、子どもと向き合う時間の充実に繋げて参りたいと思う。

- ・それから2点目に、坂本委員、永見委員から意見のあった、地元企業をよく知ってもらう取組が必要ではないかということ。これは本当に、ふるさとキャリア教育を推進する県としても大事なことだと思っている。地元の経済界との意見交換の場を、現在も設定したり、それから生徒自身が地域を知る、地域に出て行って経営者の話を聞く機会、これは専門高校だけではなく、先日は鳥取西高の生徒たちも、そういう場所に出て学んだ。このような取組により、地域、地元企業をしっかりと知る。その意味で、永見委員のおっしゃった探究的な学習をより定着させていきたいと思っている。
- ・学力向上について、たくさん意見をいただいた。石原委員から意見のあった、やはりパッケージでの研修の充実が大事だということ。その研修項目を作るだけではなく、いかにそれを落とし込んでいくかという点。そういう意味で堀江委員、或いは馬淵委員からも意見があった。やはり、そもそも学力って何だろうねということをしかり教員が理解した上で、教員の指導力を高めていくということは本当に大きな意味があって、子どもたちに、それをいかに落とし込んでいくのかということが大事であり、そういう意味で、石原委員から意見のあった目標設定ということの大切さ、これも非常に教員がどれだけ意識してできるかということだろうなと思っている。
- ・永見委員、それから山下委員から意見のあった英語力については、おっしゃる通り、小学校からの学びが非常に重要であること。小中高というプランを策定しているので、これもしっかりと落とし込んで参りたいと思う。
- ・馬淵委員からは、何が学力低下の課題だろうかということであった。基礎基本は一定程度あるが、今求められる力、つまり、考えて試行して自分で表現していく。その辺りがやはり十分ではないというところがポイントになってきているので、そのための授業改善を伝えていきたいと思う。
- ・最後に、不登校対応についても意見をいただいたが、ここは学力同様に、やはり学校、教室、授業が安心できる場所、わかる場所であること。これに尽きるのではないかと思う。堀江委員から意見のあった、伴走型、非常に大事な視点であり、教員の立場を大事にしていきたいと思う。
- ・山下委員から意見のあった、動画配信もあると良いというご指摘について、現在使っている「すらら」という教材には動画配信もできるようになっているので、これらを駆使しながら、子どもたちの学び、そして学校の大切さを充実させていきたいと思う。

7 閉会

(中西局長)

- ・皆様から貴重なご意見いただき、感謝申し上げます。最後に、平井知事に挨拶をお願いする。

(平井知事)

- ・本日は、総合教育会議の皆様よりすばらしいご意見をいろいろと頂戴し、教育委員の皆様でも受けとめられ、教育長も総括をされた。ぜひ、こうした方向で、授業の改善だとか、或いは一人一人に寄り添った教育だとか、また様々な学校体系に関わる問題など、みんなで一緒に考えて、少しでも子どもたちにとって良い環境ができればと思いつつ伺った。まだ、今年度半ばであり、この後、新年度に向けてフォローアップをさせていただきたいと思う。今日のご意見を我々としても、しっかりと吸収しながら、教育委員会の方でも受けとめていただいて、教育改革に繋がればと思う。
- ・ユニークだなと、いろいろと思いつつ伺っていたのは、午睡、昼寝の話である。なるほど確かに集中力が沸くのかもしれないし、私も大分年が重なって、昼寝したいなという時もある。子どもたちも、それで集中力が上がるのかもしれない。人間が集中して、短期間で効率よく、成長する時を大切に作っていくというのは、昼寝にもその効果はあるのかもしれないと思いつつ伺っていた。教育委員会からの答えはなかったが、こういう観点のことも、今後フォローアップして考えてみてほしいのかなと思う。「学校の試験過ぎたら 昼寝かな」という句を思い出した。これは正岡子規の句であるが、正岡子規は学校の試験が終わってほっとして、自分も覚えがあるが、ガーッと弁当食って寝るといふ、そういうようなことなのかもしれないが、そういう子どもたちの体との相談だと思う。休みたいときにちょっと休むことで、その後の集中力が高まるのかもしれない。

- ・本当にいろんな観点のユニークなご意見も含めていただいたところであり、これを生かしながら、鳥取県の教育の発展を進めていければと考えている。
- ・本当にお忙しい中、お時間をいただいた。感謝申し上げます。

(中西局長)

- ・以上を持って、令和4年度第1回鳥取県総合教育会議を終了する。